

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：13904

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770091

研究課題名(和文) 日本近代文学における 文学賞 の意義と作用 『改造』懸賞創作を中心に

研究課題名(英文) Significance and Effect of Literary Awards on Modern Japanese Literature: The KAIZO Literary Award

研究代表者

和泉 司 (IZUMI, TSUKASA)

豊橋技術科学大学・工学部・講師

研究者番号：50611943

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究計画は、戦前の総合雑誌『改造』が昭和初期から企画した 文学懸賞 である『改造』懸賞創作が、日本の近代文学の展開に与えた影響と意義について調査・分析したものである。有名雑誌の『改造』が新人の純文学テキストを定期的に募集し、それを誌上に掲載したことは、日本の 文壇 を大きく変容させた。一方で、授賞作家たちは 懸賞作家 と呼ばれ、コネクションや閥の力が強い 文壇 の中で活動するための十分な環境を得られず、数作で消えていったり、戦争協力に積極的になる者も多かった。本計画を通して、現在の 文学賞 中心の日本近現代文学の状況を、『改造』懸賞創作の生滅が象徴していることを示した。

研究成果の概要(英文)： This research plan is an analysis on how the KAIZO Literary Award, begun in the early Showa era by the general literary magazine Kaizo, has affected the development of Modern Japanese Literature, and the significance of these effects. The fact that Kaizo, a well-known magazine, regularly offered a prize for new literary works and published them as a magazine changed the Japanese literary scene drastically. On the other hand, prize winners, known as "award literature," struggled for recognition in the literary world, which was strongly influenced by connections and factions. These prize winners disappeared after a few works, and some actively supported war efforts.

This research plan shows that the KAIZO Literary Award symbolized the situation of modern Japanese literature in the early Showa era.

研究分野：近代日本語文学

キーワード： 文学懸賞 文学賞 『改造』 文壇

1. 研究開始当初の背景

現在、日本における文学活動は、文学賞を中心として動いているといってもよい状況にあるのではないか。このような観点から、本研究計画を着想した。

年に二回発表される芥川龍之介賞・直木三十五賞を「頂点」とする日本国内の出版社や自治体が主催・運営する文学賞は非常に多種多様であるが、通底する機能として、文学賞の授賞によって受賞作家・作品の評価と知名度、宣伝ルートが定まるといえるものがある。文学テキストの評価と格付けが文学賞によって形成され、それが市場での流通量に反映していき、商業的利益に結びつくことによって、文学賞の立場を強化していくことになる。このような形で文学賞の存在が文学活動の中心軸になっているという観点に立ち、文学賞の仕組みが日本の文学史上のいつ登場し、確立していったのかを確認しようというのが本研究計画の発端であった。

その際、芥川賞・直木賞に先行して登場し、かつ、当時の日本の領域内で知名度の高かった文学賞として、総合雑誌『改造』が企画した『改造』懸賞創作の存在を想起した。1927年、『改造』の創刊10周年の記念イベントとして企画されたこの文学賞は、それから中断期間もありつつ10回の実施をみた。そこからは戦前の日本で活躍した複数の作家を生み出し、また多くの「文学青年」たちに、著名誌『改造』に直接アクセスできるという大きな機会を提供することになった。これは、同人誌活動や出版社・作家とのコネクション形成に頼っていた従来の「作家デビュー」の方途にとってブレイクスルーとなる新たな手段だったのである。

しかし、同時代に大きな影響力を持ち、またこれまで様々な文学研究の場でその存在自体はよく知られていながら、『改造』懸賞創作の内実の調査はほとんど進んでいなかった。一つの文学賞企画の登場が、文学活動の有り様を大きく変えたという意味で、『改造』懸賞創作の意義は芥川賞・直木賞に匹敵、あるいはそれを越えるものだったのではないか。そのような重要性に気づいたところから、この企画の調査・分析の必要性に思い至った。

2. 研究の目的

本研究計画では、一九二八年から三九年まで雑誌『改造』で募集・発表されていた文学懸賞・『改造』懸賞創作が、日本の文学の展開に対してどのような影響を及ぼしたか、その意義と作用を解明することを目的とした。

先に述べたように、『改造』懸賞創作は、純文学対象で定期的に募集・発表される文学賞としては最初期のものであり、現在まで続く公募型文学賞を形作ったものであ

ると言える。なにより重要なのは、従来、賞金目当てと評価され、軽視されてきた文学賞の仕組みを、作家デビューの手段として定着させた点である。個人が直接マスメディアに文学テキストを掲載させるための経路を、文壇において最大の権威性を持っていた『改造』が提供するようになったことは、文学活動の有り様と、その裾野を大きく拡大させた。それは『改造』懸賞創作が、張赫宙と龍瑛宗という、二人の植民地出身者を当選させたことと、これに象徴されるように、植民地地域や海外からの多数のテキスト応募を受けていたことから明らかである。

文壇から遠く離れた地域に住んでいても、何らかの文壇グループに関わっていても、テキスト本位の評価によって作家となれる可能性を示したことは、『改造』懸賞創作の大きな成果であった。

このような『改造』懸賞創作であるが、その調査・分析はほとんどなされていないのが本研究計画を立案するまでの状況であった。そもそも、文学賞それ自体を検討する先行研究が乏しく、文学賞は作家・テキストを分析・評価する際の材料とはなっても、それ自体が検討対象になっていなかったのである。

しかし、ここまで述べたように、『改造』懸賞創作、そしてその前後に登場した文学賞は、日本の文学状況を大きく変容させる仕組みであり、その仕組みは現在までより強固になりながら維持されている。つまり、日本の文学状況を考える上で、文学賞は非常に重要な意味を持っているのである。このような観点から、本研究計画は、『改造』懸賞創作の調査・分析を行い、そこに現在までの文学賞の原型を見いだす作業を通じて、

文学賞の意義と、その仕組みの限界について考察することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究計画は、以下のような方法で進められた。

(1) 全10回の『改造』懸賞創作に関する情報の収集と整理。当選作家の中には、作家として著名になった人物もいれば、数作を発表した後に作家としての消息が明らかではない人物も複数存在していた。そのような人物についてのその後の経歴や発表テキスト・出版物などを探索し、データを収集した。

(2) 当選テキストおよび発表状況についての調査・分析。当選作家に関する情報を元に、当選テキストと発表状況について検討し、選ばれた経緯や当選のもたらした影響、テキストの価値等について考察した。

(3) 『改造』懸賞創作の存在が同時代とその後に与えた影響についての調査・分析。『改

造』懸賞創作に関連して発生した事件やテキストについて検討し、文壇や作家、作家志望者たちに与えた影響について考察することで、『改造』懸賞創作の登場とその後の展開が日本の文学活動に与えた影響を確認した。

4. 研究成果

『改造』懸賞創作当選者の経歴・当選後についての調査の結果1名(第9回当選者・渡辺渉)を除いた当選作家の状況はかなりの部分明らかになった。また、作家・編集者およびその周辺の回想記等から、選外佳作となったテキスト群の執筆者の推定作業も進めた。こちらは作者名が非公開であったため、一部に限られるが、後に著名な作家となる人物が複数、『改造』に投稿していたことが確認できた。

また、本計画以前から、龍瑛宗(第9回)、田郷虎雄(第4回)についての調査・分析は発表していたが、その周辺テキスト・文学活動についての調査・分析を重ねた。また、戦前戦後を通じ活躍した芹澤光治良(第3回)の活動を通じて、当選作家が懸賞作家とみなされた状況と影響についての考察も行った。

さらに、『改造』懸賞創作が全盛であったころ(1930年代半ば)に開始された芥川賞・直木賞の動向にも注目し、中で、戦前の台湾で詩人として登場した邱永漢が、戦後日本に亡命した後、直木賞受賞作家となった点に、文学賞とポスト植民地文学・日本語文学との関連を考慮しつつ、調査・分析を行うことで、戦前に拡大した文学賞の仕組みが、戦後にいたって文学動向を左右する軸として機能し始めた状況を確認した。

以上より、『改造』懸賞創作の登場とその後、当選作家たちのおかれた状況の推移、競合文学賞の状況や展開を確認する作業を通じて、『改造』懸賞創作が近現代日本の文学活動に与えた意義と作用を分析する上で大きな成果を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

和泉司、「国共内戦」と日本、その時の邱永漢「長すぎた戦争」を中心に、社会文学、査読無、41、2014、19-33

和泉司、邱永漢「濁水溪」から「香港」へ 直木賞が開いたものと閉ざしたもの、日本近代文学、査読有、90号、2014、77-92

和泉司、生き残った懸賞作家・芹澤光治良『改造』懸賞創作と懸賞作家へ

の考察、日本文学、査読有、62巻、11号、2013、13-23

〔学会発表〕(計 6件)

和泉司、台湾人日本語作家は東京に何をみたのか—『改造』当選作家・龍瑛宗から考える、日本近代文学会東海支部第55回研究会、2016年3月20日、名古屋大学

和泉司、国語と軍隊-台湾の皇民文学を中心に、民衆史研究会2015年度大会、2015年12月6日、早稲田大学

和泉司、邱永漢にとっての「大衆文学」直木賞の意義と制約、＜東アジアと同時代日本文学フォーラム＞第二回国際シンポジウム、2014年10月25日、中国・北京師範大学日本語学部

和泉司、国共内戦と日本、そのときの邱永漢「長すぎた戦争」を中心に、日本社会文学会2014年度春季大会、2014年6月21日、東京学芸大学

和泉司、邱永漢の「日本人論」分析 高度成長期日本と国府統治下台湾の狭間で、日本台湾学会第16回学術大会、2014年5月24日、東京大学

和泉司、在台2世と植民地日本語雑誌新垣宏一の文学活動とそのテキスト、＜東アジアと同時代日本文学フォーラム＞第一回国際シンポジウム、2013年10月19日、韓国・高麗大学校日本研究センター

〔図書〕(計 1件)

和泉司他、双文社出版『改造社のメディア戦略』、2013、329

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6．研究組織

(1)研究代表者

和泉 司 (IZUMI, Tsukasa)
豊橋技術科学大学・工学部・講師
研究者番号：50611943